事業計画書

1.　事業名称　　ユースボランティア育成を通じた子ども地域活動支援モデル事業

2.　実施主体

■　団　体　名：　特定非営利活動法人こぱてぃー子ども参画イニシアティブ

■　事業担当課：　青少年課

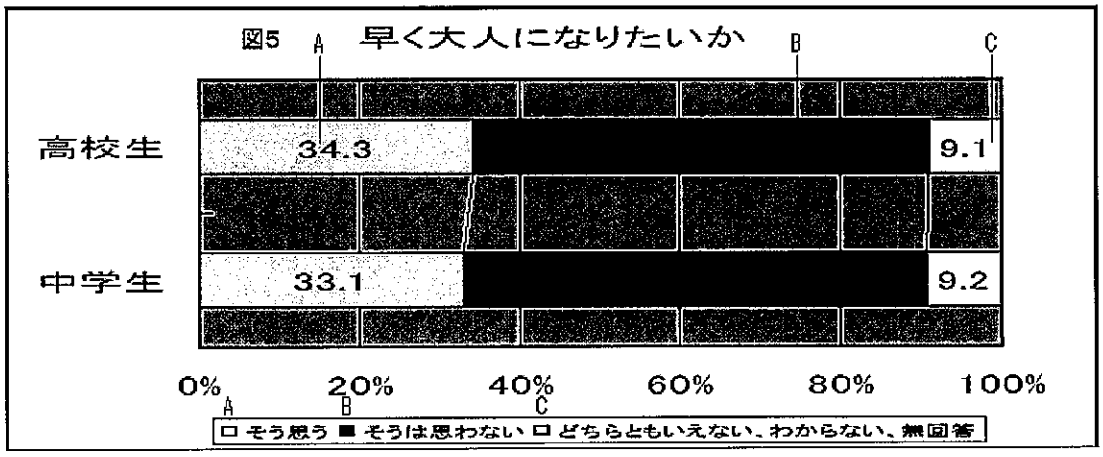
3.　取り組もうとする課題

【現状の問題】＝地域が「青少年の自立しにくい」かつ「社会性を獲得しづらい」環境となってしまっている

以下、青少年の自立及び社会性獲得に必要な要素としての「異年齢交流」、子ども期の体験から「異年齢交流」が減少している事実、そして松戸市の近年の動きでわかったことについて、詳しく述べる。

■青少年が自らに自信を持ち、自立していくために、異年齢交流が大切

中央教育審議会の答申にて引用されている、NHK 放送文化研究所『中学生・高校生の生活と意識調査』（平成 15 年）では、中高生の半数以上は早く大人になりたいとは思わず，大人になることへの負担感や不安・自信のなさを感じている、という調査が上がっている[1]（下記棒グラフ・円グラフ参照）。



[1] 中央教育審議会 次代を担う自立した青少年の育成に向けて－青少年の意欲を高め，心と体の相伴った成長を促す方策について－（答申）　http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/07020115/001.htm

図6－1　大人になりたくない理由（中学生）

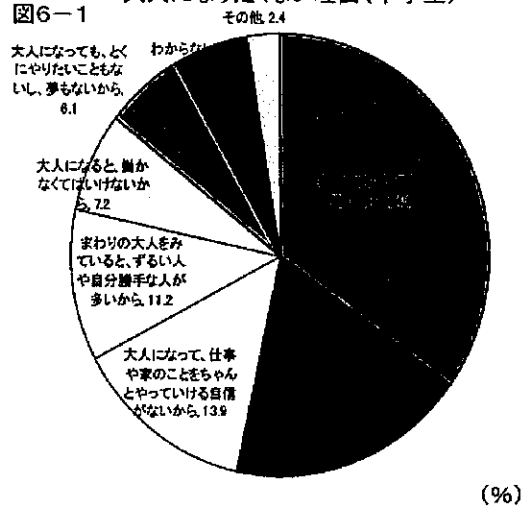
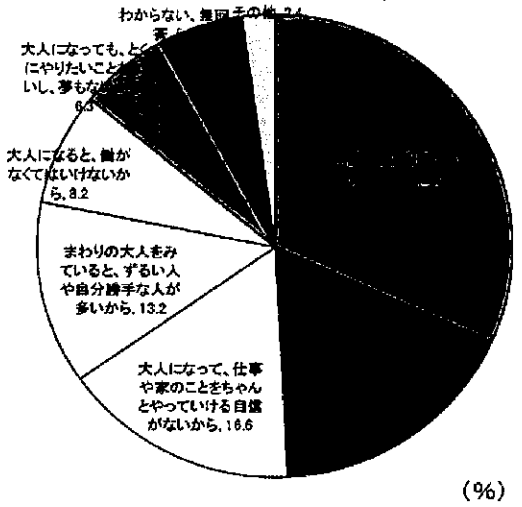


図6－2　大人になりたくない理由（高校生）



子どもの育ちにおいて、親・先生以外、つまり家族・学校以外での人間関係は、大きな影響を及ぼす。内閣府発行の平成20年版青少年白書において、Benesse教育研究開発センターによる「若者の仕事生活実態調査報告書」が引用されており、小中学校時代に「親や学校の先生以外の大人と話すこと」があった若者ほど「仕事における態度・能力に自信をもっている」という関係性が指摘されている。また、松戸市内で開催している「だいすき松戸！子どもフェスティバル[2]」においても、参加した青少年ボランティアのアンケートで「子供がなついてくれたり、名前を呼んでくれたりすると、とてもうれしかった（19歳）」「なんかやくにたてたと思う（中学3年）」と、異年齢の中で、青少年が存在を受容され、自信を獲得したことがわかる。

■子どもが社会性を獲得する際にも、異年齢交流が大きな役割を果たす

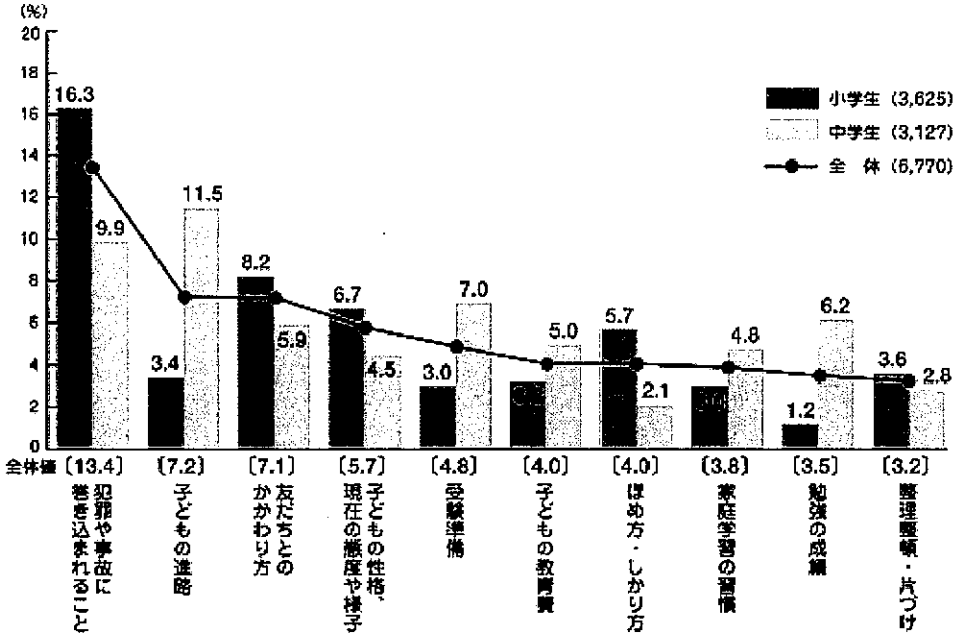
同Benesse教育研究開発センターによる「第3回子育て生活基本調査」で、小・中学生をもつ保護者の子育て生活の実態、しつけや教育に関する意識が掲載されている。その中で、近年の保護者の関心事・懸念点として「しつけ」などの問題と比較して、「子どもの進路」「受験準備」と並んで「友だちとのかかわり方」に対する心配が相対的に増加している[3]（現状値については、次ページ「現在の一番の気がかり」グラフ参照）。

文部科学省の調査・研究「児童生徒の社会性を育むための生徒指導プログラムの開発（平成13年～15年）」では、子ども同士が遊びを通して「かかわり合い」を学ぶ機会は、近隣でも家庭でも大幅に減っており、深化・統合の対象となる子どもたちの基礎的な社会体験自体が乏しくなってしまっている、と指摘され、異年齢の交流活動において①他者とのかかわり合いを楽しいと感じること、②年長者がその役割を自覚して、自信を持てることの2点を踏まえて社会性の基礎を育むことができると結論づけられている[4]。

---

[2] だいすき松戸！子どもフェスティバル（市内NPOと青少年会館による実行委員会が主催、共催＝松戸市教育委員会）
[3] http://www.benesse.jp/berd/center/open/report/kosodate/2007/hon/index.html
[4] 「社会性の基礎」を育む「交流活動」・「体験活動」―「人とかかわる喜び」をもつ児童生徒に―
http://www.nier.go.jp/a000110/syakaisei.pdf

図1－2－1　現在の一番の気がかり（全体・学校段階別）



注1）38項目中から1つ選択。全体値の上位10項目を図示した。
注2）「全体」には学校段階が不明の者も含む。
注3）項目は一部，略記した。詳細は調査票見本（p.137）を参照。
注4）（　）内はサンプル数。

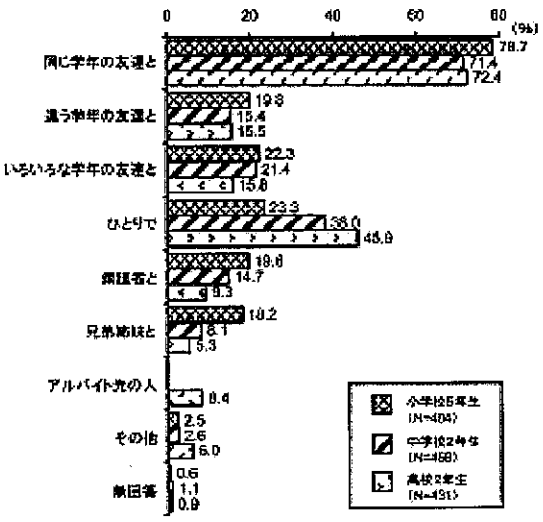
■少子化・核家族化と、まちなかでの遊びが減少し、異年齢交流の機会が失われている。

全国的な子どもの環境の傾向として、核家族化・少子化が進行している。ここ松戸市においても次世代育成支援行動計画の後期計画にも記されているように、核家族世帯が62.6%と比較的多く、18歳未満の児童がいる世帯は減少傾向にあり、24.4%となっている。さらに、地域社会が希薄化しているという現実が進行、深刻化している。

子どもたちが成長する上で、多様な人と接し色々な生き方を学ぶためには、親・先生以外の大人や、学校のクラスの友達以外と出会う場が、子どもたちの行動範囲である「地域」に求められている。その中で、子どもたち同士のコミュニティという観点では、数値として同計画で指摘されているように「放課後に誰と一緒にいることが多いか」という設問に対し、年齢を問わず「同じ学年の友達と」が70%を超えており、次が「ひとりで」となっていて、小学生で23%、高校生では45%を超えている状況だ（右グラフ参照）。

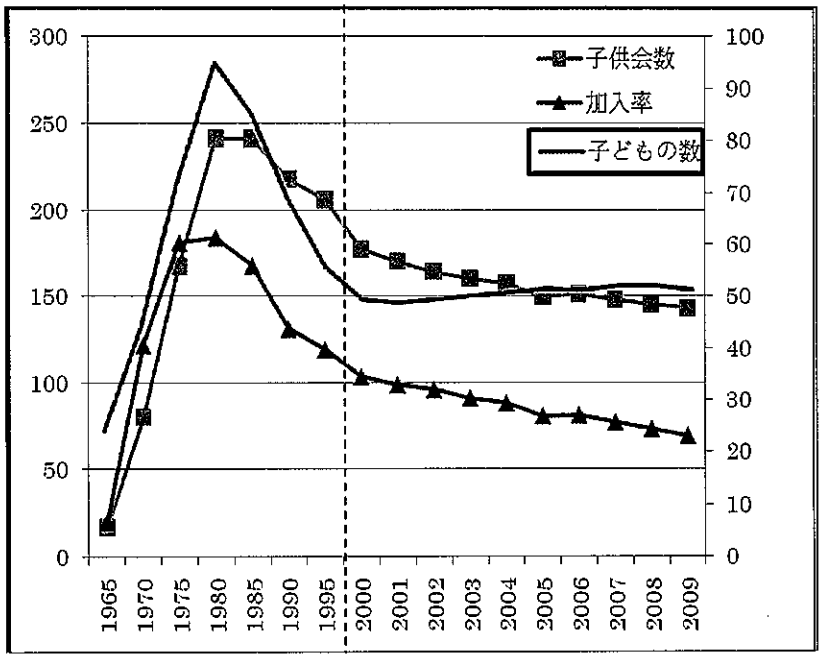
また、習い事・塾通いの増加傾向もあり、自然発生的なあそびが実現しにくくなってきている。あそびの場、異年齢交流の機会を子どもたちに届けるには、きっかけの提供が必要といえる。

●図1　放課後に「誰と」いることが多いか（松戸市「次世代育成支援に関する調査 平成20年度」）



【解決の必要性】…子どもたちが異年齢交流できる場を地域で実現するために

子どもたちが異年齢集団の中で遊びを通じた交流ができる場、子どものコミュニティの核のひとつとして、子ども会が挙げられるが、松戸市においては近年、加入率が下がっている（下グラフ参照）。



提供：松戸市青少年課
1995年までは5年おき、以降は年次のデータをプロット。

子どもの数が、2000年以降、横ばい上昇気味なのに対し、子ども会の数（左軸）・加入率（右軸パーセンテージ）ともに低下している。

平成22年度に弊法人と松戸市・青少年課が取り組んでいる協働事業にて実施したアンケート・ヒアリング結果より、「役員を決めるのが大変」「大人が固定化してしまい、保護者の入れ替わりがない」「子どもの加入が少なく、イベントが実施できない」などの課題が浮き彫りとなり、子どものあそび・コミュニティをサポートする事業の必要性がより明確化された。

一方で、アンケート結果に地域的な偏り・傾向が見られ、地区・コミュニティの状況に合わせた子どもの地域活動支援の必要性がわかり、子ども会や子どもの地域活動の担い手が抱える課題を現場との交流・実践する中で掬い上げることが求められている。

4.　事業内容及びスケジュール

・事業内容

本事業では、

- **10 代後半から 20 代を目安とした若者を、ユースボランティアとして育成**
- **ユースボランティアが子ども会の活動に参画し、地域活動の負担を軽減する**
- **スキルをもったユースボランティアの参画によって、小学生の体験活動を豊かにする**

の 3 点を目的とし、子どもたちが、気軽に行ける行動範囲にある、年齢の離れた子ども同士・子ども－若者の交流の場である子ども会を、体験提供の場とし、10 代後半から 20 代を目安とした若者をユースボランティアとして育成する。

対象として、10 代・20 代の「ユース」、各地で地域活動に取り組んでいる「単位子ども会」の二者を設定し、ユースボランティアが子ども会の活動に参画することによって、地域活動の負担を軽減するとともに、親世代と共に協力することでより魅力的な社会体験を、主に小学生世代の松戸市内の子どもたちに提供する。

また、協働事業の現状から次に進むステップとして、これまで接点のなかったユースボランティアと子ども会をつなぐツールとして企画カタログを作成すると共に、出会いの場・マッチングイベントを 1,2 回実施することで、子どもの体験・活動を支える保護者・地域の大人との間に、「顔の見える関係」の構築をより具体的に進めていく。さらに、子ども会のもとで活動しているジュニアリーダー・シニアリーダーとも交流を深め、地域の子どもたちの体験を単位子ども会の活動などの場で有機的に支えていける仕組みを検討する。

■ **ユースボランティア講座**

対象：中学生～20 代

各講座 3 回（座学、あそび実地体験、企画実践）　を、2 期実施する。

■ **企画カタログの作成**

平成 22 年度のユースボランティア講座受講生と、新規に募集したボランティアと共に、子ども会を想定した子ども・親子向け企画をビジュアルでもわかりやすく制作する。

■ **ユースボランティア・子ども会マッチングイベント**

対象：単位子ども会

ユースボランティアと共に企画した子ども会向けの企画を説明すると共に、若者と子ども会の大人が出会って具体的な企画へ進める出会いの場。1～2 回を予定。

・想定されるスケジュール

	具体的な取り組み	実施体制、対象者、場所など
４月～６月	企画カタログ作成 ユースボランティア育成講座①	担い手；こぱてぃスタッフ、 初年度ユースボランティア 対象：中学生～20代
７月～９月	ユースボランティア育成講座② ユースＶ・子ども会マッチングイベント	対象：中学生～20代 対象：単位子ども会
10月～12月	イベント企画実習 子ども会との共同企画 （～３月まで、３件予定）	対象：講座受講生 担い手；受講生と単位子ども会
１月～３月	ユースＶ・子ども会マッチングイベント	

※場所について、企画会議などは弊法人事務所、講座は公共施設を予定。

5.　事業に期待する成果

対象	指標
ユースボランティア	20人を目標として、広報・育成する マッチングイベントにて子ども会に対して自分たちの企画をアピールできるようになる
単位子ども会	モデル事業として3地域（単位）でイベントを協働で実施 アンケートなど、ふりかえりによる負担軽減の把握
小学生（子ども）	イベントに参加した小学生の感想による満足度調査 モデルイベントにおける子ども会未加入者との接点づくり （指標としては、イベントへの未加入者の参加数）
子ども会ジュニアリーダー	本事業のユースリーダーとの交流の機会を設ける 単位子ども会の事業のサポートで共に活動する

上記成果をもって；

- 子ども会でのイベント時に、異年齢交流が生まれ、子どもたちの地域体験活動が充実すること
- 一過性のイベントを通じて、交流・体験活動の価値が理解され、継続的な参加の機会となること
- 異年齢交流の中で、ユースボランティアが地域の取組に参画し、自信を身につけること
- 地域活動を支えている保護者・大人の負担感が軽減されること

が実現し、青少年を取り巻く環境の改善につながっていく。

6.　協働の意義

提案者のメリット

NPO 法人こぱてぃー子ども参画イニシアティブは、子ども・若者の地域における社会参画を推進し、子ども・若者が社会の一員として意見を反映することができる社会を目指している。

これまで設立当初より 90 回以上実施してきた「あそぼう会」の運営ノウハウを、市内の子どもたちに広く届けることができる。

小学生の体験活動の企画・実施に対して、ユースが取り組むためのスキルを身につけ、場を提供することで、若者の社会参画の実現につながる。

今までの活動では、保護者との関係は参加者の進学とともになかなか地域の中でつなげていくことが難しかったが、子ども会という組織を支援する関わりを持つことで、地域の保護者の自らの団体に対する理解が、継続的に広がる可能性につながる。

市のメリット

次世代育成支援行動計画上の「全ての子どもが自分らしい夢を持てるようになる」、さらに「子どもが色々な生き方を学ぶことができる」の具体的な場として、ひとつである、学校外・地域におけるこどもの社会参加活動を推進できる。

その１つとして、現在加入率の低下している子ども会に対して、青少年課だけでは実現できない手法で、事務局的視点からより現場に近い視点に立った、単位子ども会の支援を行うことができる

また、同計画上で「子どもにとって安らげる家庭・家族」を実現するため、「親子の遊び場」として公園・こどもの遊び場を設置している。その遊び場を活用する主体である、子ども会による公園の活用方法を広げることができる。

協働することによる利点

NPO 法人こぱてぃの抱える課題・今後の方向性である、地域の中でどうやって保護者に理解を広め、小学生の子どもたちに体験を届けていくかという視点と、松戸市として取り組む意思が表現されている、学校外活動が行われやすい地域環境の高い比重を占める子ども会の活性化という視点から、本「ユースボランティア育成を通じた、子ども会・子ども地域活動の担い手支援モデル事業」を提案する。

上述したように、NPO・行政単体では実現がむずかしい領域である、子どもの地域体験環境の改善に取り組むことができる。

7.　事業実施の役割分担

■　提案者の役割

事業全体のマネジメント

ユースボランティアの育成

単位子ども会へのヒアリング

単位子ども会とのモデル事業の実施

企画会議などの運営

中学校・高等学校などに協力依頼に伺う際に、日程の合う限り青少年課と同行する

■　担当課の役割

本事業実施における、公共施設会場の確保

松戸市子ども会育成会連絡協議会との本事業に関する事務局としての調整・情報共有

＊ 子ども会 13 地区長を通じた、単位子ども会への一斉情報発信

中・高等学校などへのユースリーダー育成講座の配布・掲示依頼、および定期便経由の配布

単位子ども会とのモデルイベント実施時の、該当地域小学校でのイベントチラシの全校配布依頼

単位子ども会とのマッチングイベントを実施する際の呼びかけ

松戸市施策上での位置づけ・展開の検討

8.　将来の展開

本モデル事業の成果として、ユースボランティアという人的資源およびスキル・ノウハウの伝播、また単位子ども会へのモデルイベントの実施を経た、保護者とボランティア、地域と NPO の信頼関係の構築があげられる。

協働事業を 3 年のモデル事業と捉えた際、平成 22 年度を立ち上げ期、平成 23 年度は展開期と位置づけている。平成 23 年度では、初年度より多くの単位子ども会・地域と共に企画をする中で、地域との信頼関係の構築を図る。平成 22 年度実施する中で、アンケート・ヒアリングによる課題把握、ユースボランティアの育成という成果があがっており、さらに単位子ども会との共同企画に向けて 10 月現在打ち合わせを進めている最中である。現場の「生」の情報を得られたことで、この事業を継続的かつ多くの地域に進めることで、より多くの地域に好影響を残し続ける成果があがる。

平成 24 年度の展開として、協働提案制度・モデル事業としての総括を予定している。現行の松戸市次世代育成支援行動計画では、大項目側から「全ての子どもが自分らしい夢を持てるようになる」→「子どもが色々な生き方を学ぶことができる」→「いい友達や先輩に出会うために年齢や地域などを超えた交流を推進する」→「こどもの社会参加活動を推進」となっており、青少年課が担当課と位置づけられている。

現行では子ども会活動支援事業がそのひとつとして位置づけられているが、本事業を平成 23 年度に実施した成果をもって、「こどもの社会参加活動を推進」するための事業として、どういった支援が、誰に対して必要で、どのように実施していくのか、弊法人をはじめとする相手との協働の在り方（補助・委託・事業協力などを含む）を、23 年度中から具体的に検討を進め、24 年度の事業提案に反映させ、松戸市の次世代育成に向けて成果があがるよう行動する。より多くのユースボランティアを輩出し、単位子ども会など地区単位での活動支援を行うことも可能になると共に、明確な施策上での位置づけを進める。

将来的には、現在行われている次世代育成支援の枠組みと合わせて、教育・生活の一環として、異年齢交流という子どもの地域体験の拡充を捉え、協働事業でのノウハウやデータを行政施策に生かしていくことが可能になるため、協働事業として時限でモデル事業として取り組む価値は十分にある。

事業の予算計画

【社会資源持ち寄り（収入）】　　（単位：円）

	（自己資金）	金　　額	積算内訳
提案者		59,200 円	団体拠出金
	自己資金合計（a）	59,200 円	
	労力換算額計（b）	184,000 円	労力換算計算書のとおり
市	負担金申請額（c）	172,800 円	
資金合計額（d）（a＋c）		232,000 円	事業費（g）と同額

【負担金申請額（c）チェック項目】

1．対象となる経費（e）欄の 90%以内　　192,000×90% = 172,800

2．1 事業あたり 50 万円以内

3．自己資金（a）欄に労力換算額（b）欄を加えた額以下であること。

【事業費の積算（支出）】

項　　目		金　　額	積算内訳
負担金の交付対象経費	報償費	60,000 円	学習会講師 2 名、30,000 円
	印刷製本費	60,000 円	企画カタログ、チラシなど
	消耗品費	48,000 円	プリンタインク、A4 用紙ほか
	通信費	16,000 円	80 円×200 ヶ所
	保険料	8,000 円	スタッフ保険
	対象となる経費合計額（e）	192,000 円	
その他経費	スタッフ飲食費用	円	
	スタッフの交通費	40,000 円	講座・実習・編集会議など
	その他経費合計額（f）	40,000 円	
事業費（g）（e＋f）		232,000 円	収入合計額（d）と同額

※　対象となる経費、対象とならない経費については、募集要項を参考にして下さい。

労力換算計算書

（単位：円）

項　　目		換算額	積算内訳
労力換算額	活動計画		人数×時間×回数×500 円
	ゲームリーダー講座（座学）	10,000 円	2 人×5 時間×2 回
	ゲームリーダー講座（実習）	30,000 円	3 人×5 時間×4 回
	イベント企画実習	30,000 円	3 人×5 時間×4 回
	マッチングイベント	6,000 円	2 人×3 時間×2 回
	月例スタッフ会議	72,000 円	4 人×3 時間×12 回
	担当課との月例協議	18,000 円	1 人×2 時間×18 回
	チラシ・カタログ作成	18,000 円	3 人×3 時間×4 回
合計（b）		184,000 円	